令和４年度
日本精神科医学会学術教育研修会
報　告

PSW 部門

藤枝　信夫　　三舩　義博

令和４年10月21日，日本精神科医学会学術教育研修会PSW部門がメインテーマを「ポストコロナに求められる精神保健福祉士の役割～鳥取県依存症拠点機関における連携の取り組みを通じて～」とし，鳥取県支部の担当により鳥取県立県民文化会館「とりぎん文化会館」を発信場所としてweb開催された。

開会式の後，会長講演として「精神科医療の将来展望」という演題で，山崎學先生の講演が行われた。精神保健福祉行政の歩みについて，1818年，日本で初めて私立の精神科診療所，石丸癲狂院が開院されたことから，1958年，特例措置による精神病床増床，1968年，精神病床を減らすべきとのクラーク勧告，2004年「入院医療中心から地域生活中心へ」との精神保健医療福祉の改革ビジョンが示されたことまで一気に話された。次いで精神科医療における社会的偏見について，日本の精神病床は本当に多いのか？　精神科病院に入院すると身体拘束されるのか？　など，具体例を挙げて説明された。

最後に，精神科医療の将来像として，高齢化・少子化を見据えた精神科医療体制の見直しの重要性を強調されて話をまとめられた。

講演Ⅰは，「精神保健福祉士の歴史的背景と役割」という演題で日本精神保健福祉士協会常務理事の木太直人先生が講演された。

はじめに，精神保健福祉士（以下，PSW）の歴史的背景について説明された。前身である日本精神医学ソーシャル・ワーカー協会が1964年に発足。その後，さまざまな経緯を経て，1997年12月に臨時国会にて「精神保健福祉士法」が成立し，現在に至っている。

PSWの総数は，令和４年３月末現在で９万7,339名。その配置状況は，①医療：7,089名，②教育：294名，③福祉：１万5,601名，④行政機関等：3,089名となっている。

懸念事項としては，総数が2017～2020年の間で，9,822名から9,374名（448名減）へと初めて減少に転じ，その後も減少傾向が継続していることで，精神病床の減少が原因の一つと考えられている。

次に，PSWの役割について，具体的な業務内容を「業務指針第３版」に沿って詳細に説明された。現在は，2018年から「PSWの養成の在り方等に関する検討会」での検討を経て，役割の拡大が図られている。

最後に，PSW（Psychiatric Social Worker）からMHSW（Mental Health Social Worker）への拡大の必要性を強調され，結びとされた。

昼食を挟んで，講演Ⅱは，「依存性疾患の理解と対応」という演題で，社会医療法人明和会医療福祉センター渡辺病院の副院長である山下陽三先生の講演が行われた。

まず総論として，「依存症（アディクション）の理解」と題して，依存が形成されるまでの経過を説明していただいた。次に「治療の現状」を，渡辺病院アルコール・アディクション治療プログラム（ARP）を具体例として挙げ，その内容を詳細に説明していただいた。大切なこととして，以

下のポイントを挙げられた。

①医療機関での依存症治療プログラムを用意し，同じ仲間との出会いを保護する。

②回復に取り組んでいる仲間との出会いが自分の依存症問題を認める大事な機会となる。

③情報提供と同時に，感情を大切にしながら治療に関わる。

④多職種での関わりと地域資源の活用がキーワードとなる。

⑤家族教育など周りで困っている人への啓発と支援を忘れてはならない。

講演IIIは，「鳥取県アルコール健康障害支援拠点病院の取り組み」という演題で，社会医療法人明和会医療福祉センター渡辺病院の看護師・相談支援コーディネーターである林敏昭先生が講演された。

2014年のアルコール健康障害対策基本法施行後，鳥取県では2016年，全国に先駆けてアルコール健康障害支援拠点機関の指定が進められたことが紹介され，渡辺病院での取り組みについて詳しく説明がなされた。アルコール健康障害対策の枠組み（発生予防，進行予防，再発予防），相談支援コーディネーターの業務，アルコール健康障害支援拠点機関の相談実績，治療実績，活動実績などが紹介された。

シンポジウムは「依存性疾患に対する多職種連携～鳥取県依存症拠点機関の取り組みを振り返って～」と題して鳥取県精神保健福祉センター所長である原田豊先生の座長にて行われた。まず，5名のシンポジスト（医師の立場から：渡辺病院 山下陽三先生，看護師の立場から：渡辺病院 秋里俊伸氏，行政の立場から：鳥取市保健所保健師 山桝加於理氏，当事者の立場から：鳥取県断酒会東部支部長 安部裕之氏，PSWの立場から：渡辺病院 岩岸直美氏）が各々専門職の立場から話をされた。

当事者である安部氏は「妻の説得で入院治療を受け断酒会につながった。アルコール依存症の自分を救ってくれたのは妻である。一人で立ち向かうのは大変。断酒会が自分には必要であった。生き方を変え酒が必要なくなったが，多くの支援と時間が必要だった」などと話され，非常に説得力のある内容であった。

討論では，最後にコロナ禍で人との付き合いが希薄になっている中，ポストコロナに向けてのPSWの役割が重要であると締めくくられ，シンポジウムを終えた。

引き続き閉講式が行われた。日本精神科医学会から受講証書の授与がなされ，鳥取県支部長・渡辺憲先生へ感謝状が贈呈された。続いて学術研修分科会構成員の閉講挨拶があり，全日程を終了した。

おわりに，本研修会の企画・運営に当たられた渡辺憲支部長ならびに鳥取県支部の諸先生，およびスタッフの皆様方に深く感謝申し上げるとともに，鳥取県支部の今後の発展をお祈り申し上げたい。

（日本精神科医学会
学術教育推進制度学術研修分科会）